

カールグレン「Compendium」を読む(1)

中村雅之

1. はじめに

“Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese.” *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 26 (1954): 211-367. は、20世紀前半に漢語音韻史研究において画期的な業績を残したカールグレンが、1954年に自説の要点をまとめたものである。短い前書き(211-212頁)に続いて、第1部分(212-271頁)が中古音の概説、第2部分(217-367頁)が上古音の概説になっている。

漢語音韻史の研究を志すものは、カ氏の研究を知るのに、*Études sur la phonologie chinoise* (1915-1926)の漢訳本『中国音韻学研究』(1940)か、あるいは本概説を利用するのが常であった。本来は*Études*の原文を読むべきだとも言えるが、フランス語よりは中国語や英語の方が、多くの学生にとってはずっと取組みやすかったのである。もっとも最近ではそれすらも煩わしいということで、学生や院生がカールグレンを読む機会はほとんどないようである。

本概説は上述の通り Stockholmの研究誌に掲載されたものだが、頁数そのままのリプリント版が、Göteborgで1970年に、台北で1988年に出ている。現在でも入手は難しくないはずである。本稿もこれら二種のリプリント版による。以下、「Compendium」の解説を兼ねつつ、幾つかの問題について触れてみたい。なお、必要な箇所は日本語に訳して引用するが、その冒頭に原文の頁数と行数を示すことにする。

2. 音声と音韻

本概説のタイトルは「中古漢語と上古漢語における音声組織の概説 (Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese)」というものであるが、カールグレンの研究対象が音韻ではなく、音声であるという点は重要である。カ氏の初期の著作である*Études sur la phonologie chinoise* (1915-1926)が漢訳本で『中国音韻学研究』と訳されたのは通りをよくするための便宜である。故橋本萬太郎博士がかつて授業で語った所によれば、フランス語の「phonologie」は英語の「phonology」ではなく「phonetics」に相当する語であり、漢訳本のタイトルは厳密ではない、ということであった。実際、この英語版 Compendium においては、phonology は用いられず、phonetics という表現で一貫している。

カールグレンが中古漢語の有声破裂音の帯気性を問題にした(これについては次回に詳述予定)のも、求めたものが音声である以上、当然のことであった。現在では音韻論的に対立

がないということで、中古音における有声破裂音が有気音か無気音かについてはあまり議論にならないが、音声を追究したカ氏にとっては無視できない問題だったのである。

### 3. 中古漢語と上古漢語

カールグレンによる中古漢語と上古漢語の定義は以下の通りである。

【212頁第3行】韻書『切韻』において体系化された西暦600年頃の言語、すなわち陝西省長安の方言を、中古漢語 (Ancient Chinese) と呼ぶことにする。この言語は唐代を通じてコイナーのような共通語になり、福建省の沿岸部を除く全国の主要都市の教養人たちによって話された。(原注1)

これに対して上古漢語 (Archaic Chinese) とは、西周時代 (1028B.C. ~) の河南省の言語を意味する。『詩経』など早期文献における押韻、および諧声字 (意符と声符からなる) によって明らかにされる。(原注2)

【原注1】当然の事ながら、各地の最下層の人々は卑俗な方言を多く保存していた。そして様々な土語の中には今でも唐以前の言語の痕跡も認められる。しかし共通語は広く普及し、上流層から下位中流層までの広範な人々によって受け入れられていたのであり、福建とその近隣地域の閩方言を除くほとんど全ての現代諸方言の祖となった。『切韻』の音声カテゴリーと現代諸方言との著しく密接な対応から見て、『切韻』は実際に話された一つの言語を記述したものであって、近年の研究者たちが主張するような、数種の方言の要素を備えた人工的な折衷物ではない。

【原注2】諧声字から周代初期の言語が明らかになるという説明には、但し書きが必要である。「捨」が意符「手」と声符「舍」からなるという時、その意味は、まず「すてる」に対する仮借として「舍」があって、後に意味を限定するために「手」を加えた、ということである。多くの経書では、意符のない「舍」を「捨」の意に用いる。実際、意符は漢代になって大々的に加えられたもので、周代には声符がほとんどの場合単独で仮借として用いられている (ただし周代初期および中期の金文にはすでに意符がかなり見られる)。したがって意符のあるなしは言語学者にはどうでもよいことで、重要なのは、周代初期にはすでに仮借が大量に行われていたという事実である。

中古音・上古音を意味する英語は、現在では「Middle Chinese」「Old Chinese」が一般的になっている。なお、カ氏が『切韻』の体系を唐代長安音と見なした点は、様々な議論を巻き起こした。有坂秀世 (1936)「隋代の支那方言」(『国語音韻史の研究増補新版』所収)は、『切韻』の体系を、洛陽の言語を基礎として南方標準語の要素も若干加味したものといい、周祖謨 (1966)「切韻的性質和它的音系基礎」(『問学集』所収)は、主に南方の雅音に依りつつ南北音を折衷したものとしている。

『切韻』と唐代長安音とが、声母においても韻母においても体系を異にすることは現在では広く認められている。『切韻』の体系を「前期中古音 (Early Middle Chinese)」とし、慧

琳『一切経音義』の反切や日本漢音などによって知られる唐代長安音を「後期中古音 (Late Middle Chinese)」と称することがある。

なお、上文中の「コイナー (Koine)」とはアレクサンドロスの帝国で広まった共通語としてのギリシア語。転じて、「共通語」を意味する。

#### 4. 韻書と反切

【212頁第13行】 601年に陸法言らによって編纂された『切韻』はすでに失われて久しい。その増補版である『唐韻』(751A.D.)も同様に、現存するのは更なる増補版『広韻』(1007A.D.)である。近年になって『切韻』および『唐韻』の種々の写本残巻が発見され、その主要な残巻と『広韻』とを収めた立派な資料集が『十韻彙編』として出版されている。

『切韻』『広韻』は中古漢語の音形を知るための最重要の資料である。まず、漢字(音節)が206韻(東・冬・鍾・江韻など)の下に網羅的に配列されていて、音価は知り得ないものの、600年頃に主母音と韻尾を同じくした文字がグループにまとめられている。さらに重要なことに、全ての字には反切(反転と切断)によって発音が示されている。反切は二字からなり、最初の字は声母を、二番目の字は韻母を表す。例えば、「東」は「徳紅切」つまり「t(e)-(h)ung」の切断＝「tung」、「千」は「蒼先切ts'(ang)-(s)ien＝ts'ien」、「光」は「古黄切k(u)-(h)uang＝kuang」と表音される。このように、主母音と韻尾以外に、介音の-i、-uも考慮される。

『切韻』および各種増補版の唐代写本や五代刊本の残巻については、上田正(1973)『切韻残巻諸本補正』(東京大学東洋学文献センター叢刊19)が今なお最も信頼できる資料集である。周祖謨(1983)『唐五代韻書集存』(北京:中華書局)もあるが、高田時雄(2002)「敦煌韻書の発見とその意義」(『草創期の敦煌學』、知泉書館)において、「出来る限り寫眞によって原姿が窺えるようにし、さらに詳しい考釋を加えたもので、本来ならスタンダード・ワークになり得るものであろうが、惜しむらくは用いられた寫眞が著しく鮮明さを缺く。出版年代は比較的新しいが、仕事そのものが1945年に始められたものと序文にあり、資料も古いものをそのまま用いたために、この結果となった。」と評されたとおりである。

「反切」に対するカ氏の英訳は「turning and cutting」である。つまり、「反」は「反転」の意、「切」は「切断」の意と考えた。そのため、「AB切」という形式についても、「AB」の切断という解釈をとっている。「反」と「切」の意味するところについては考えるべき問題が多い。cf. 中村雅之(2003)「古代反切の口唱法」(『KOTONOHA』第10号)。

## 5. カールグレンの官話表記

前節において、反切の原理を説明する際に「徳」に対して「te」、「千」に対して「ts'ien」のような表記を用いている。これらのローマ字表記は中古音を示したのではなく、一種の現代音である。Etudes 以来、カールグレンが用いる現代音は自ら「Mandarin (官話)」と呼ぶものであるが、当時通用していた北京官話そのものではなく、19世紀までの西欧宣教師による伝統的な官話表記(=南京官話)を北京風にアレンジしたもので、カ氏の創作である。

Karlgren(1940), *Grammata Serica* に記されたカ氏自身の説明(台湾版45頁)によれば、この表記法はウェイド(Thomas F. Wade)式表記をやや修正したものであることであるが、実際にはウェイド式の名残はほとんどない。最も異なるのは、尖団を「祭tsi」と「計ki」のように明瞭に区別する(ウェイドは共にchiとする)点で、これは全く19世紀以前の西欧宣教師の伝統によったものである。このような架空の音形の方が、20世紀前半の西洋人にとっては、実際の北京音や南京音を反映した表記よりも、「現代音」として理解しやすかったということなのであろう。

カ氏の「官話」表記の具体例をいくつか示すと、「岸an」「安an」「白po」「得te」「結kie」「節tsie」「学hüe」「歌ko」「客k'o」となる。つまり、影母・疑母を完全にゼロ声母とする点と、入声韻母の音形については北京音(文言音)を採用し、尖団の区別については19世紀以前の伝統的な南京官話、そして「歌ko」「客k'o」などの韻母は北京音ではないがウェイド式、という折衷表記である。なお、「得」「徳」に対する「te」は、*Grammata Serica* などではウェイドと同様に「tê」とされていたが、本概説では一貫して「te」と簡略化されている。